ISTVS アジア・太平洋地区会議および中国紀行

東北大学大学院環境科学研究科 教授 高橋 弘

平成 16 年 9 月 13 日から 19 日まで中国長春・北京を訪問し，ISTVS(International Society for Terrain-Vehicle Systems)アジア・太平洋地区会議に参加するとともに，世界遺産である故宮・万里の長城などを見学する機会に恵まれた. 本会議は 3 年前程から平成 16 年に長春市で開催されることが決まっていた．長春市は仙台市と姉妹都市であり，また地理的にも冬期はかなりの積雪があるので，日本建設機械化協会東北支部の前事務局長である齋恒夫氏をはじめ数名の方々と以前から,「この会議で「日本における除雪機械の自動化および除雪システムの現状」に関する論文を共著で発表し，また会議終了後に中国の歴史に触れる旅を実施しましょう」と話をしていた．本年 4 月に，高橋 弘, 齋 恒夫，山崎 晃((株)日本除雪機製作所東北営業所)，深堀 哲男(日立造船(株)東北支社)，山田 仁一(三菱重工業(株)東北支社)の 5 名連名で論文を事務局に提出し，6 月に発表受理の連絡を受け，旅行日程の詳細な詰めに入った．会議の日程や飛行機の便の関係などでなかなか詳細な行程がまとまらなかったが，結局，山田 仁一氏が筆者に最初から最後まで同行して下さることになり，また会議終了後に，北京で齋 恒夫氏，深堀 哲男氏，山崎 晃氏と合流し，中国の歴史に触れる旅に出かけるという行程になった．ここでは，我々が経験した中国での珍道中をご報告したいと思います.

ガイドがいない？

ツアーをお世話頂いた名鉄観光の担当者からは，長春空港では「高橋様ご一行」のプラカードを持った男性の現地ガイドが我々を出迎えるとの説明を受けていた．入国審査を終え，荷物を受け取り，空港の外に出て,「高橋様ご一行」のプラカードを見つけるが一向に見当たらない.「北京・上海・西安・西都 7 日間」というプラカードが目に入ったが,「ここは長春なのに変なツアーもあるもんだ」としか気にも留めず，ひたすら「高橋様ご一行」のプラカードを探すが見つからない．もしかしてと思い「名鉄観光」のプラカードもあちこち探すが，全く見つからない．小さな空港である．5 分も探せば，空港の隅から隅までチェックできる．15 分以上も探していると，さすがに不安になった.「これは困った．さてどうするか？」と悩んでいると,「北京・上海・西安・西都 7 日間」というプラカードをもっていた若い女性が話し掛けてきた．私のお客さんではないかと聞いてくる．北京には行く予定があるが，上海や西安に行く予定はない．しかもガイドは張さんという男性である.「上海や西安に行く予定はない．こんなツアーではない．張さんという方が迎えに来てくれるはずなんだが・・」と言って，名鉄観光からの資料をそのガイド(孫さん)に見せると,「張さんは自分の同僚だ」という．山田氏が張さんはどこかと聞くと「吉林市にいる」とのこと．なんといい加減な！この女性ガイド，本当に信用できるのか？もし，若い女性ではなく，いかつい男性だったら，間違いなくマイクロバスに乗り込まなかったが，話しているうちに，本来の張さんは都合がつかなくなり，代役を頼んだようだと推察できた．代役を頼まれたガイドの孫さんは吉林大学の 4 年生．いわゆるアルバイトであり，あまり詳しいことは聞いておらず,

渡されたプラカードを持って空港に迎えに行くように言われたらしい．完璧に納得できた訳ではなかったが，おおよその事情は飲み込めたので，マイクロバスに乗り込みホテルに向かったが，空港を出てからマイクロバスに乗り込むまで，ゆうに 30 分を越えていた．

再確認って何？

出発前に名鉄観光の担当者から「今回の旅行では再確認が必要です」との説明を受けた．最近，どこの航空会社でも再確認は不要になっているので，思わず「面倒だね～」と本音を漏らしてしまった．「72 時間前までに再確認が必要ですから，長春に着いたらガイドさんに 1,000 円程度チップを渡し，再確認をしてもらって下さい．その方が楽です．」と言われ，自分もその通りと感じていたので，ホテルにチェックインした後，すぐに再確認の手配をお願いした．しかし・・・こちらの言っていることをガイドが全く理解していない．今回の行程では，長春に 3 泊した後，北京に入り，北京で観光してから上海経由で仙台に戻ることになっていた．北京から上海経由で仙台に戻る帰りの国際線は，まだ再確認の時間が十分にあるが，長春から北京に飛ぶ便は明々後日であるので，ちょうど長春到着日が 72 時間前に当たる．従って，我々は夕食より先に再確認を済ませ，それからゆっくりと中国最初の夜の食事を楽しみたいという気持ちがあった．しかし，ガイドの孫さんは再確認の必要性はおろか再確認そのものさえ理解していない．必死に再確認が必要であることを説明するが慌てる様子もなく，頭を抱えそうになった時，孫さんが我々の航空券の裏側に記述されている文章に気付いた．そこには中国語で「72 時間前までに予約の再確認をすること．再確認しないと予約が取り消されることがある」と書かれていた．それを読んだ孫さんは初めて再確認の意味およびその重要性を理解したようであったが，時は既に午後 8 時を過ぎており，いかんともし難い．「自宅に帰ればマネージャーの電話番号が分かるので，マネージャーに話せば大丈夫です．ちゃんと再確認できます．安心して下さい．私を信頼して下さい．」とガイドは言う．しかし，読者の皆さんも経験あると思うが，酔っ払いほど「自分は酔っていない」と自分の実態と逆を主張する．その論理を適用すると，信用できない人間ほど，「自分を信用しないさい」と主張することになる．しかも最初の出会いからして大チョンボ．信頼性ゼロである．「安心して下さい．信頼して下さい」と言われても，「はい，そうですか」という訳にはなかなかいかない．そうかと言って，他になすすべもない．英語でなんとかなるなら自分で再確認するが，北京ならともかく長春は田舎であり，英語はほとんど通じない．しかも夜遅い．仕方なく，再確認は翌日ガイドに任せて，遅い夕食を取ることにしたが，非英語圏での旅行の難しさを実感した．後から知った話だが，ガイドの孫さんは飛行機に乗った経験はないとのこと．しかも旅行会社の正社員ではなく，大学生のアルバイトであり，再確認を知らなくても無理はない．しかし，我々は北京に着けるかどうか不安な夜を過ごすことになった．

会議の場所が分からない！

翌 14 日，ガイドさんには会場までタクシーで連れていってもらうことにした．会議の事務局から前もって送られてきた資料には吉林大学としか書かれていないので，ガイドさんから「会議の場所は何処ですか？」と聞かれた時，「吉林大学」と答えるしかなかった．しかし，「吉林大学は

広いので，これだけでは分からない」と言う．確かにその通りだ．東北大学に置き換えてみよう．会議が東北大学で開催されるとしても，それだけの情報で迷うことなく会場までたどり着ける人は 100%いない．つまり，「会議の場所は何処ですか？」「はい，東北大学です」と言っていることと同じである．東北大学と言っても，川内北キャンパス，青葉山キャンパス，片平キャンパスなど多くのキャンパスがあり，かなり詳細な情報がない限り，会場までたどり着くことはほぼ不可能である．一瞬，頭が真っ白になったが，しかし会議の内容は工学系である．工学部に行けば，看板か何かあって何とかなるだろうと思っていた．しかも住所・電話番号も書かれている．「そうだ，何とかなる」と考え，とりあえずタクシーで出かけた．しかし，タクシーでそれとおぼしき場所に行くが，どの場所もまったくの見当違い．ガイドさんが資料に記された事務局の電話番号に電話をかけるが応答なし．時間だけが過ぎていく・・・1 時間の余裕を持ってホテルを出たのに，既に 45 分が経過し，会議開始時間はあと 15 分後に迫っている．筆者は，開会式直後にキーノートスピーチをしなければならないので，時間がない．気持ちだけが焦っていたその時，ガイドさんがやっと事務局の方と電話で連絡がついた．なんと驚いたことに会議はホテルで開催されるとのこと！「ホテル・・・？ そうなら，ちゃんと会議はホテルで開催すると前もってアナウンスしろよ！」．文字通り目が点になった．なんといい加減なことか．我々が宿泊している中日友好会館から会議が開催されるホテルまでダイレクトに行けばほんの 10 分程度であるが, なんとほぼ 1 時間かけてぎりぎり滑り込むという，まさに綱渡りの到着であった．

読者の皆さんは,「会議に参加した他の方々はどうしたのだろうか」と不思議に思われるかもしれない．しかし不思議でもなんでもないのである．実は，長春空港および長春駅には会議前日から事務局のスタッフが詰めていて，ISTVS 会議参加者をピックアップして，全員をバスでホテルに連れていっており，そこで会議登録させ，ここで会議が開催されることを参加者にアナウンスしているのである.「ホテルで会議が開催されることをここで初めて知った」と私の友人が話していたが，全く日本の常識では考えられない．しかし，これが実態である．外国に行ったら，日本の常識は通用しないとよく言われるが，まさに身をもって経験した．

ISTVS 会議

会議では，初めに中国側代表として吉林大学の Ren 教授より，また日本側代表としてテラメカニックス研究会の会長である立命館大学の深川教授よりご挨拶を頂いた．引き続き，筆者が「Automation and Intelligence in Crushed Rock and Limestone Quarries in Japan」と題してキーノートスピーチを行った．さらに吉林大学の Ren 教授が「The Characteristics of Drag Reduction by Biomimetic Non-Smooth Surface」と題してキーノートスピーチを行った．昼食を挟んで午後から論文発表に移ったが，会議のセッションは以下のような構成になっている．括弧内の数字は，そのセッションでの論文数を示している．

Session 1 : Soil-Vehicle Interactions and Dynamics(8)

Session 2 : Modeling and Simulations(9)

Session 3 : Precision Control and Tests(9)

Session 4 : Soil-Tool Interactions and Soil Properties(8)

Session 5 : Terrain-Machine and Information Technology(9)
Session 6 : Biology Technology and Engineering Bionics in Terrain-Machine(8)
Session 7 : Other Technology in Terrain-Machines(8)

論文の数だけ見れば，59 とそこそこであるが，実際に口頭発表された論文数は，多分半分にも満たないであろう．中国での開催ということで，中国の研究者からの論文が多くを占めたが，かなりの数の論文発表がキャンセルされた．ひどいセッションになると，口頭発表が行われた論文が 1 編というところもあった．これでは討論にならない．10 年ほど前に同じ ISTVS アジア・太平洋会議が同じく吉林大学で開催されたそうだが，その時のひどさに今回，参加を見合わせた日本の研究者も少なからずいるとの話を聞いた．

筆者は，セッション 7(その他というセッション名も芸が無いが)に発表を組まれ，「The State-of-the-art of Snow Removers and Snow Removing System in Japan」と題して，最新の除雪機械・除雪システムに関する発表を行った．大半の研究対象は土壌であり，雪に関しては反応はどうかと思っていたが，ドイツから参加していた研究者から「夏期に除雪機械を使用する試みはあるのか？」と言った質問を受けた．いわゆる除雪機械の通年活用である．確かにこれは日本でも大きな課題であり，東北地方整備局でも「除雪機械の通年活用に関する検討会」を設け，調査研究にあたるなど重要課題の 1 つである．どうやら除雪機械の通年活用は日本だけの課題ではないようである．筆者も上記検討会に参加させて頂いている関係から，散布車を表示車として使用する試みやロータリ除雪車のオーガ部分を取り外してポンプを設置し，排水ポンプ車として利用する試みなどが行われていることを説明した．発表終了後，席に戻るとさらに隣の方から，「グレーダはどうか？夏期に道路工事などに利用しないのか？」と聞かれた．さすがにこれに対する回答は持ち合わせていなかったので，一緒に会議に参加して下さった山田氏に現状をお聞きしたが，除雪グレーダは専用機であり，道路工事には使用していないとのこと．このことを質問者に伝えたが，「何故，使わないの？」とさらに質問を受けた．日本のシステムを説明したが，グレーダを夏期に使用しない理由を理解できないようであった．なお，雪に関する論文発表はもう 1 編あり，アラスカ大学の先生が，雪面とタイヤとの相互作用に関する有限要素解析に関する結果を発表していた．

しかし，何度も述べるようだが，会議に欠席者が多いのは会議の質を低下させ，議論が活発にならず極めて悪い傾向である．「論文集に論文が掲載されればそれでいい」という考えが根底にあるのではないかと想像するが，これでは会議に発展は望めない．改善を求めたいが，そう言えば，筆者は中国の方と一緒にセッション 2 の座長を仰せつかった．当日，一緒に座長を行うはずの方が，セッションの前半は席にいたものの，後半開始直前に「あなたは司会進行が上手だから後半も宜しく頼む」と言ってどこかに行ってしまった．私の常識では有り得ないことが，またしても起こった．

会議参加者全体写真(後ろは会議の会場となったホテル)

じゃんけんで決めましょう？

我々が宿泊した長春のホテル(中日友好会館)には，日本食のレストランが入っていた．私と山田さんは，初日および 2 日目の晩ともに 9 時 30 分頃にこのレストランに入り，10 時の閉店まで日本酒を飲んで色々ととりとめもない話をして友好を深めていた．9 時 30 分にもなると，さすがにお客は誰もいなかったが，初日および 2 日目の晩ともに，我々の後から 60 歳くらいの 1 人の男性が入ってきて，ビールを飲みながら食事をしていた．2 日目の晩ともなると，異国の地での日本人同士ということで，お互い会話が弾むようになる．2 日目の晩，先に勘定を済ませた男性が再びレストランに戻ってきた．「ラウンジは 10 時半まで開いているので，ビールでもどうですか？」と誘ってきた．断る理由もないので，その後，3 人でラウンジでビールを飲んだが，10 時半の閉店時に男性が「では，じゃんけんで負けた人が払うことにしましょう」と言い出した．再び目が点になった．「おいおい，誘っておいてじゃんけんかよ！」・・・私，コップ１杯のビールで，約 1,000 円を支払ってきました．

ぼったくりタクシーに遭遇？

長春最後の晩，山田氏の提案で，街中の少し気の利いたレストランで食事をしましょうということになった．そこで，立命館大学の深川先生，建山先生をお誘いし，両先生に同行していた芦田さん(博士課程学生)，小林先生(九州大学)，Bui さん(立命館大学留学生)を含めた総勢 7 名でが中日友好会館からレストランに向かった．目指すレストランは長春飯店．ガイドブックによれば長春最大のレストランとのこと．ここなら美味いものが食べられそうだと思い，2 台のタクシーに分乗した．地図上ではだいたい 20 分程度，料金は約 10 元(1 元は約 14 円)程度と予想されたが，何分乗っても目的に着かない．そのうち，どうやらタクシーは街中を旋回しているということに

気付いた，筆者は深川先生，建山先生とタクシーに乗っていたが，両先生もなんだかおかしいと感じ始めたらしい．しきりと地図を見ながら首をかしげている．私は助手席に乗っていた建山先生に先行するタクシーのナンバーを控えるようにお願いした．というのは，山田氏らが乗っている先行するタクシーの後を我々のタクシーが追いかけるように走っているのである．40 分も経っただろうか，いい加減嫌気がさしてきた頃に，やっとタクシーが長春飯店に到着した．しかし，我々の態度から運転手は「警察にでも駆け込まれたらやばい」と感じたのだと思う．料金 20 元を示しているメーターを指差し，さらに左右に手を振っている．この料金は違うという意味である．さらにその後，10 元紙幣 1 枚を取り出し，それを指差している．つまり，「メーターは 20 元を示しているが，10 元でいい」と言う意味である．日本円に換算すれば，20 元払ってもたかだか 280 円程度なので，何も目くじら立てるほどの金額でもないが，「ぼったくられた」となるとなにより気持ちが悪いし，その後のビールもまずくなる．10 元でいいというので，何も言わずに降車したが，食事を終えて再びタクシーで中日友好会館に戻った時，正規ルートで 12 元だった．つまり往路の運転手は，「ぼったくろう」と思い，逆に 2 元損した訳である．「人間，悪いことを考えずに，まっとうに仕事しなさい」といういい見本である．

長春飯店での食事

長春最大のレストラン・・・間違いはなかった．確かに大きい．しかし・・・一般大衆レストランじゃん！ 確かにガイドブックには最高級レストランとは書いていない．最大とある．がっかりしたが，それでも 3 階は個室になっているので，気を取り直しとりあえず席に着いたが，当然のことながら英語のメニューは「没有(メイヨウ)：無いという意味」．メニューに書かれているのは訳の分からぬ漢字と金額だけ．料理の写真も無いので選びようがない．ウェイトレスは日本語はおろか英語も理解不能．こちらは日本語，ウェイトレスは中国語．コミュニケーションができるはずがない．席に着いてからビールを飲むまでに 15 分かかるという珍問答．しかも冷えていない生ぬるいビール．料理は推察するしか手立てがない．唯一，間違いないと注文したのは麻婆豆腐．それ以外は何が出てくるか分からない．いわゆる闇鍋状態．チャーハンを食べたいという意見に芦田さんがメニューからこれだと思われるものを選択したが，ウェイトレスが別なものを推薦している．そこで，言われるままに注文したが，芦田氏いわく「多分，麺系の料理だと思う」．出てきた料理は何かと言えば・・・トウモロコシの炒め物でした(笑)．

長春飯店にて(左から山田さん，筆者，ウェイトレス，建山先生，深川先生，小林先生，Bui さん)

長春市内見学そして北京へ

16 日は長春から北京に飛び，齋さん，深堀さん，山崎さんと空港で落ち合う予定である．フライトは夕方であるので，それまで長春市内観光に出かけた．訪れた場所は偽皇宮．清朝のラストエンペラーで，満州国の傀儡皇帝・愛新覚羅溥儀の宮殿だった建物．さすがに長春での一番の観光スポットと見えて，朝早くからかなりの観光客が訪れていた．ガイドの孫さんが片言の日本語で色々と説明してくれるが，そこはアルバイト．どうしても詳細な部分になると分からない事が多い．ところが，山田氏はガイドの孫さんが知らない歴史的事実を実に明解に説明してくれる．ガイドの孫さんは，「山田さん，すごいねー」と大変驚いていた．何故，山田氏はそれほどまでに偽皇宮や中国の歴史に明るいのか？ガイドさんが驚くのも無理はない．山田氏が偽皇宮を訪れるのは前日に引き続き 2 回目なのである．実は，前日，ISTVS 会議の同伴者用レディースプログラムで偽皇宮観光が企画されたが，山田氏はそのレディースプログラムに参加し，流暢な日本語を話すガイドから偽皇宮や中国の歴史について詳細な説明を受けていたのである．

偽皇宮

北京空港で合流

北京空港到着は我々の方が 1 時間以上遅いので，齋氏，深堀氏，山崎氏の 3 人には空港で長時間待たせることになってしまった．長春の１件もあったので，はたして無事にガイドさんと巡り合えるか若干不安であったが，今回は何も問題なく，無事，３人に再会．マイクロバスで夕食のレストランに向かった．北京のガイドさんは，いわゆるガイド専門のプロで，日本語も長春のガイドさんから比べれば遥かに上手．レストランに着けば，メニューで何を注文しようか迷う必要はない．席に着けばビールと料理は自動的に出てくる．確かに前日に比べれば極めて楽である．しかし，食後のウェイトレスのしつこい急須・茶碗の押し売りにはほとほと閉口した．また我々は若干疲れ気味なのにガイドさんがしきりに「カラオケなどどうですか？」とオプショナルツアーを勧めてくるのにも参った．この日は一切の誘いを断り，ホテルにチェックイン後，各自休みを取った．

北京市内観光

筆者が北京を訪れるのは 10 数年振りであったせいか, 北京の町並みはすっかり近代化の様相を示していた．特に北京の銀座と言われる王府井は全く様変わりしていた．10 数年前のような雑駁した状態ではなく，極めて綺麗に整備されており，近代的な銀座と言った感じで，その変わり様に大変驚くとともに，中国の活力を感じることができた．しかし，最初に訪れた天安門広場および故宮(紫禁城)は 10 数年前と同じで，徐々に昔の記憶が蘇ってきて非常に懐かしい感じがした．この天安門広場および故宮は北京でも一番の観光スポットであるためか，平日にもかかわらず非常に多くの観光客で朝から賑わっていた．故宮は非常に広いので限られた時間で見学するために

は，ある程度ルートを絞らなければならない．いくつかの見学ルートがあるようだが，ガイドさんが,「前に来られた時はどの辺を見られましたか？」と聞いてきた．当然ながら覚えている訳が無い．ガイドさんの推奨コースで見学したが，壁に刻まれた竜の彫刻だけは極めて鮮明に覚えていた．次に故宮に隣接している景山公園に行き，景山の山頂から故宮全景を見渡した．山頂に行くまでに何段もの石段を上らなければならなかったが，山頂から眺める故宮の全景は，ガイドブックではないが,「まさに息を呑むほど美しい」ものであった．さて，この石段登り．最も元気だったのは山田氏であった.「手術されてよかったですね」と声をかけようとしたら，後ろから次のような囁きが聞こえてきた.「やっぱりチタンが入っていると違うね～」

王府井にて

景山の山頂から眺める故宮の全景

次に訪れたのは天壇公園．明・清代の皇帝が五穀豊穣を祈った場所で梁と釘を一本も使用しないで建築されていることが特徴である．周囲の壁は回音壁と言われ，壁にささやくと反対側の人に伝わる仕掛けになっている．しかし，大勢の観光客の喧騒の中では，壁に直接耳を押し付けない限り, この回音壁の効果を確認するのは極めて困難である. 10 数年前, 筆者はこの場所を訪れ, 壁に耳を押し付けて回音を確認したが，今回，回音壁を訪れると，壁を保護する関係から壁に直接近づけないように柵が設置されていた．従って，今回は回音を直接確認することができず，少

し残念であった.

夕食は天壇公園近くのホテルで北京料理．北京料理と聞けば誰しも北京ダックを思い浮かべるであろう．筆者も今夜の夕食では北京ダックが食べられるのであろうと思っていたが，何てことは無い，普通の中華であった．長春から朝昼晩に中華料理を食べつづけている筆者の胃は，その油っこさで若干パンク気味であった.

天壇公園にて

頤和園・万里の長城観光

18 日は午前中に頤和園を観光し，万里の長城に向かう途中で昼食を取り，午後に明の十三陵と万里の長城を観光した．初めに頤和園だが，ここは西太后が再建した庭園，夏の離宮である．庭園内の広大な池(昆明湖)も人造湖とは驚きである．この頤和園も訪れるのは 2 度目であり，10 数年前は万寿山の中腹にある仏香閣にまで登り，昆明湖を見渡したが，今回は時間の関係上，途中で引き返してマイクロバスに乗り込んだ. しかし, その次に連れていかれた場所が大笑いである. なんと北京で一番大きいと言う翡翠の専門店！男 5 人，宝石店で何を買うと言うのか．筆者にとっては全く時間の無駄以外何物でもない．椅子に座って，ただのお茶を飲み，ひたすら時間が過ぎるのを待っていた．こんな場所に 30 分も 40 分も費やすのであれば，もっとゆっくり頤和園を観光させて頂きたいと思ったのは筆者だけではなかろう．しかし，宝石店に寄るのはツアーの一部に組み込まれているらしい．金を使わせようという魂胆であるが，これも致仕方ないことか.

頤和園(右手は仏香閣，手前は昆明湖)

宝石店を出発してからは，バスで約 1 時間ほど走り，明の十三陵へ．ここは明代 13 人の皇帝とその皇后が眠る墓．いわゆる地下宮殿(Underground Palace)である．地下宮殿が 13 あると言っても 13 全て見れる訳ではない．一般公開されているのは定陵，長陵，昭陵の 3 つであり，我々は定陵を見学した．空港のゲートチェックのように手荷物を検査され，地下宮殿に向かったが，地下はひんやりとしていて 9 月というのにスタッフは防寒着を羽織っていた．長時間，地下で警備に当たっていると冷えるのであろう．その後，遅い昼食を取った後，万里の長城に向かった．月からも見える人類史上最大の建造物と言われるだけあり(実際には月からは見えないと言われているが)，全長 6,700km にも及ぶ．我々が訪れたのは八達嶺長城と呼ばれる場所で，ここで約 40 分ほど長城登りを楽しんだ．ここでも一番の元気者は山田氏であった．この万里の長城も極めて有名な観光スポット．多くの観光客で賑わっていた．長城は結構傾斜がきつい箇所もあり，登るのに難儀する場所もあったが，5 人全員踏破した．同じゴルフで鍛えているとは言え，私は頻繁に斜面を上り下りするのに対し，齋氏，深堀氏，山崎氏はほとんどフェアウエイを歩くのであろうから，大丈夫かなあと少し心配したが，なんてことはない．皆さん，元気である．汗ばむ陽気と吹く風の爽快さがなんともうまく調和して，極めて有意義な 1 日となった．

夕食は，天安門広場の近くのレストランで宮廷料理を頂いたが，筆者の感想を書いて筆を置くことにする．「皇帝もたいして美味いものを食べていた訳ではないんだなあ」

万里の長城(八達嶺)

万里の長城にて(山田・山崎氏の背後に伸びる石段を見れば，傾斜がかなりきついことが分かる)

おわりに

　今回もまた前回のタイ旅行に引き続き，山田氏には最初から最後まで同行して頂き，非常にお世話になった．特に前半の長春ではトラブル続きで，一人ではかなり心細かったと思う．論文発表に対する質問でも，山田氏に回答を求めることもあった．会議にまで参加して頂き，有難く感じている．また後半は観光主体で，齋氏，深堀氏および山崎氏を含め，非常に楽しく過ごすことができた．やはり旅は気の合った仲間のグループで，冗談を言い合いながら行くのに限る．今回，山田氏，齋氏，深堀氏および山崎氏には大変にお世話になった．改めてここで感謝の意を示すとともに，健康でなければ旅行にも行けない．皆さんのご健康をお祈り申し上げる次第である．次回は，是非，外国でゴルフを楽しみましょう！